

豊後駿 「新たな町おこし“フラッシュモブ”の可能性 ～地域に“きらめき”を～」

日本に拡大する、地域の過疎化、若者の都会流れ。現在日本では地方の活性化が大きな課題になっている。そんな中、新たな地域活性化の手段としても、また一方では一つの余暇活動として今“フラッシュモブ”が注目の的になっている。

人々が急に集まってダンスをしたり、歌ったり、それが終わると何事もなかったかのように解散する。周囲の人はこの“非日常的ないたずら”に目を奪われる。このように一瞬にして、非日常的空間を作り出し、人々の関心を誘うのがフラッシュモブである。今ではPR、広告活動などにも用いられ、最近では動画投稿サイトYOUTUBEへの投稿も増加し、最近では広辞苑に定義が載るなど社会全体にフラッシュモブが広まっている。

「パフォーマンスの形態にとらわれず、入退会に敷居が低く誰でも気軽に参加できる。フラッシュモブが人の輪を作り、新たなコミュニティー形成のきっかけとなっている。」と話すのは、東京都東村山市在住税理士の酒井隆行さんだ。昨年11月に友人らと「東村山フラッシュモブズ」を結成した。2か月に1回、東村山市内で活動し、参加者はSNSやツイッターなどで募る他に、既存メンバーのロコミや地域のダンスチームへの依頼を行うという。始めようと思ったきっかけは地域の活力不足だった。「地域コミュニティーの希薄化を感じたからです。各種団体も個人も精力的に活動しているものの、それぞれが違う方向を向いていて活動の非力さを感じました」と話す。高齢化が進む地域での繋がり希薄さ、何か若者とお年寄りの繋がりを強調する催しが無いのか。と思案を重ねた結果思いついたのが誰でも参加できるフラッシュモブだった。しかし一方で、問題点もあるという。場所の確保だ。フラッシュモブの活動をする場合、警察の許可が必要になる。地域活性化を目的としているため、自治体や警察のルール無視は本末転倒であるからだという。

これからの地域活性化の要因として、若者とお年寄りの繋がりがあると考える。これは現代の少子高齢化社会においてとても重要であるように感じる。フラッシュモブは若者がいわば“いたずら”感覚で参加でき、日常に閉塞感や孤独感を覚えている若者は生活にスパイスをもとめてこのフラッシュモブに進んで参加する。フラッシュモブが地域振興活動だとすれば、若者の地域活動離れにも有効な手段であり、活動をしていく中でお年寄りとの関わりも増えていくのではないかと考える。そして、今度は活動でお年寄りと向き合った若者達が地域の抱える問題を他の場所でフラッシュモブにして情報発信する。こうすることで、地域の問題を都市部でも共有できるし、地域のイベントや特産品を人々が足をとめ、注視する中アピールできる。酒井さんは「フラッシュモブを通じて沢山の方々と繋がりを持ちたいと思います。その繋がりがきっかけとなって、新しい地域活性のムーブメントが興れば幸いです。」と話す。集団（モブ）による一瞬のきらめき（フラッシュ）は、永遠の繋がりと地域に活力をもたらす可能性を秘めているのだ。最後に本稿作成にご協力いただいた、酒井さん、また東村山フラッシュモブズの皆さんに感謝申し上げます。